

[制作記録]

人体と風景を主題とした画面構成とその表現

三浦 賢治

制作の主題となる裸婦表現と合わせて、画面を構成する要素として風景を用いている。風景取材に際しては、北海道の北端に近いサロベツ原生花園一帯にその地を定めることにした。日本の起伏に富んだ四季折々の景色は美しい。しかし私はそういった美しさとは別の、広漠とした風景を求めた。きっかけは平成18年秋のベルギー・オランダ研修に遡る。その年度の研修先として、平成6年秋冬のベルギー・アントワープ王立美術アカデミー研修で訪れたベルギー・フランドル地方を選んだ。その折に各地を見て回りながら、その風土に何かしら親しみを感じ、また機会があればと思っていたからである。フランドル地方の風土が自分にとって自然に感じる理由を考えたとき、眼前に広がる光景が、自分が生まれ育った地の風景に重なっていることに気付かされた。都市間の移動の車中から目に映る風景は、牧歌的な佇まいが所々北海道のそれに似ている。降り立ったときの、乾いて澄んだ空気のおいも。

風景取材を通して、自分は何を探そうとしたのか改めて考える。得たものは、スケッチや写真ではなく、目に映ったすべてのものと、晩夏にたなびく草原をわたる風の音、そしてそのにおいの記憶である。本研究は、ベルギー・オランダの風景で呼び起こされた原初的な感覚を北海道取材で再確認し、基本的な研究テーマである人体表現に重ねて反映させることを目的としている。原風景と人体という素材から、共通したイメージとして喚起される自然界の生命力を抽出して、ひとつの絵画表現に昇華させたいと考えた。絵画表現を通して“自分が在る”ということについて考えてきた自分にとって、原点回帰的な発想は極めて一般的なながら自然なことであり、自分らしい表現をするためには、そういった手法を制作に取り入れることが正直な絵を描く上で、その時点で

は必要なことなのだった。

2年にわたる本研究の中で、制作の方向性は混乱した。実際の取材や人体のデッサンを表現に展開することに躊躇し、見えるものを自然に、無作為に描こうとしたが、それはかえって作為的な結果になった。研究着手2年目を迎え、改めて制作の方向性を練り直した。制作にあたり、「見ないで描く」ことを作画する上での約束事として自身に課し、試みることにした。この場合の「見ないで描く」とは、自然の写生や人体の観察描写を制作の拠り所とせず、記憶による形体の表出とイメージの展開によって画面構成と表現を行うという、実際の制作手法を意味する。自分にとっての絵画表現上の興味は、矩形の中で息づく作者の手の跡と時間の集積によって現出する非現実的な空間、つまり虚実を織り交ぜた画面としての「絵そらごと」をいかにして構築するかということにある。その作業に至る切り口はいくつもあると思う。しかし現状において、その道筋は、デッサンの徹底によって掘り起こされる、説得力のある形体を獲得することによって見出されるのではないか、という素朴で基本的な考えに止まっている。

今回数点の作品の画面に配したアラベスク風の床面はこれも「フランドルの記憶」の一部であるが、ある種完成された記号としての強さを主張している。それに負けない強さを人体表現において実現したいと考えている。

研究の成果発表の場として、個展（光画廊2008年6月30日～7月5日、櫟画廊2009年3月30日～4月4日）において作品展示を行った。

付記 本研究は平成19年度、平成20年度発展研究「油彩画技法における裸婦（人体）を主題とした画面構成とその表現（その2）」の成果報告である。

（みうら・けんじ 油画）

風景取材写真



作品



「過日」
キャンバス・油彩
130.3×97cm 2008年



「過日」
キャンバス・油彩
178×110cm 2008年



「過日」
キャンバス・油彩
22.3×15.7cm 2008年



「裸婦のいる情景」
キャンバス・油彩
116.7×91cm 2009年



「情景」
キャンバス・油彩
162×130.3cm 2009年



「内在する情景」
キャンバス・油彩
97×130.3cm 2009年



「情景」
キャンバス・油彩
194×162cm 2009年